

今の子どもたちに
できることは
同じ目線で、一緒に悩み、
喜び、楽しむこと。



巻頭特集
インタビュー

(俳優)

高良 健吾
さん

映画「きみはいい子」で
教師役をして

僕が小学校のころは、親は、「うちの子が何か悪いことをしたら叩いてください。」と言っていました。今はそれが大問題になってしまっています。それに、学校の中で何でも教えてもらえたんですね。先生に聞けば教えてくれる。先生は何でも知っていました。だから僕たち小学生は、先生に対して「物知りだなあ」とか「すごいなあ」と尊敬していました。

でも今は、先生に聞かなくても、小学生ならばパソコンを使って調べられます。自分たちの力でできてしまうから、先生の尊敬できるところや魅力的なところは、「ネットやテレビなどからの情報ではないところ」なのだろうな、それは難しいなと、この映画をやってみてすごく思いました。

プロフィール

- 1987年 熊本県生まれ
- 2005年 テレビドラマ「ごくせん」でドラマ初出演
- 2006年 「ハリヨの夏」で映画初出演にして主演
- 2011年 『時計じかけのオレンジ』で舞台初出演
- 2015年 映画『きみはいい子』で新人教師役を演じる。
- 2016年 フジテレビ系『いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう』で民放ドラマ初主演



INTERVIEW vol.7 俳優 高良健吾さん

小学校のころの思い出を
教えてください

小学校のころは大人しい子どもでしたが、とにかく作文や図工が好きでした。作文は市で金賞の表彰をされたこともあり、作文を書くようなときは、「自分が先に書く！」という感じですぐに書いて提出していました。作文や図工を褒めてもらったことは覚えていません。

僕は、つくったものや、答えがなく、みんながそれぞれ違っていたりするものについて褒められることが嬉しかった。そういった経験が今の自分をつくっていると思います。もしかしら今のこの仕事の自信につながっているのかもしれない。

それから、とにかく虫も大好きでした。小学校4年生のときに、教室の後ろのコーナーで、僕がかまえたヤゴやザリガニやセミの幼虫を育て、それをクラスの友だちは、記録にとったりしていました。田舎の小学校に通っていたので、自然が大好きでしたね。

映画で新人教師を演じてみて
先生のイメージは変わりましたか？

学校の中のことよりも学校の外の問題も今は大変だと思っています。保護者のこととか家庭環境とか。でもそういうことは以前からあったはずで、先生た

ちの取り巻く環境が変わってきたのが、僕たちの卒業以降なのかなと思います。子どもの呼び名とかにも神経を使いますよね。保護者からの不合理なクレームがあっても、先生は無下にしてはいけませんよね。



先生は、尊敬の対象なはずですが、今は先生に聞かなくても、学校に行かなくても情報を得られるようになったことが背景にあるのではないかと思います。そういったものがこの映画の中にたくさん詰まっていたと感じます。

この映画で先生役を演じて、今日の先生方のいろんな問題や現状が分かりました。今、この子たちに何をしてあげたらいいのだろうと考えると、それは子どもたちに向き合うことだと思います。

子どもと同じ目線になって一緒に悩み、一緒に喜び、一緒に楽しむ。先生のほうが子どもに気を遣ったとしても、子どもは先生に気を遣わないし、家庭



「きみはいい子」
ブルーレイ&DVD
好評発売&レンタル中

発売・販売元：ポニーキャニオン
©2015「きみはいい子」制作委員会

だつて気を遣わない。逆に、「先生なのだから」という感じで対応される。だとすると今の先生にできることは、情報から取り出せないことを、子どもと一緒に共有していくことしかないと思いました。

挫折を乗り越えるために どうされていますか？

とにかく失敗はたくさんしている。そのかわりに、失敗の仕方はちゃんとこだわろうと思っています。今の仕事をやっていても、苦しいとか辞めたいとか思うことは多いですが、何か月か経つてみると、嫌な経験になつていないことが多いです。悔しくても苦しくても、一回何かやったら、それが次への自信になるから。たとえもつと嫌なことが来たとしても、前に「向き合っ

た」ことで「乗り越えられた」ことの自信があれば、この瞬間に来たすごく嫌なことにも「前に僕はできたから」という自信でやれるし、それがまた次につながると感じます。

頑張ることより続けるほうが難しいから、とにかく「続ける」、「続けてみる」ということですかね。その中の選択で「諦める」というのもあるかと思えます。とにかく「続ける」ということは難しいということだと思います。

だから「壁」とはあまり思わない。ただ、目標まで「長い」と考えています。壁にぶつかるといふよりは、「まだ着かない」という感じで考えています。こうした考え方であれば、もしかしたら着くかもしれないと思えるからです。今も全然「着かない」ところがたくさんありますが、前に乗り越えた自信が今の自信になつて、それを繰り返して自分が強くなつていくはず。だから、失敗はたくさんして、頑張れるのなら、頑張っておけばいい。でも、諦めて違う世界が見えるところもあると思えます。その「諦められるまでやる」というのもいいと思います。諦めるついでに選択も悪いことじゃないと思います。

小学生に伝えたい メッセージをお願いします。

めっちゃくちゃいろんなことをやっていたほうがいいと思います。自分にはこれしかないなんて絶対ないですから

やりまくつてやりまくつてやりまくつて、とにかくいろんなことにアンテナを張つてチャレンジして、自分のアンテナに引つかかつたものがあれば、それを掘ればいいだけ。それは昔よりもっと増えているだろうし、とにかく自分の目と耳を使つてやっていったほうがいいと思つています。失敗は、本当は失敗じゃない。自分の限界とかを決めるには早すぎると思います。

それから、昔から残っている言葉は、本物だから残っていると思うんですね。それつて、あんまりバカにしないほうがいいと思う。おじいちゃんおばあちゃんとかお年寄りの人が言っている言葉も。残っているものは本当に確かだから残っているの、自分の考えとか自分の目とか手とかだけで分かるものじゃなくて、いろんな人の考えに触れることはすごく大切。小学校のときに習字でよく「希望」とか「努力」と書いていましたけど、今思うとこれらの言葉は、すごく大事ですね。

小学校の先生方への メッセージをお願いします。

この映画を通して、教師が本当に尊敬する職業になりました。昔よりやりづらくなつている部分もあり、大変な職業だと思えます。

もししたら、子どもの何かを変えてしまう時期に出会う大人でもありませんよ。まず「教師になろう」と思っ

た最初の気持ちが絶対にいちばん大事だと思えます。子どもたちに嫌な思いをさせようと思つて教師になつた人はいないはずで、子どもたちの未来のためになるうと思つてやっている職業：それがもうすばらしいから、本当にすごくすてきなことから。

今は、子どもでも情報とか答えとか簡単に分かる時代だけど、逆にその人にしかできない、その人にしか教えられることはたくさんあるはずで、それを極めて磨いていつたら、その先生にしかできない、その先生にしか教えられるものがあるはずだと思えます。どの職業も同じだし、偉そうに言えないけれど、教師になつてもずっと勉強だと思えます。

